

阿蘇地域における歴史的・文化的背景を踏まえた河川景観の再生に向けた基礎的研究

九州大学大学院 学生会員 吉田嵩寛 正会員 樋口明彦
同 学生会員 吉川悠太 Byambatsogt Arvinzaya 李舒テイ
福岡大学 正会員 野口雄太

1. 研究の背景

1934年に国立公園に指定された阿蘇地域は、国立公園内に人が暮らす特殊な場所である。活火山等の自然と共生してきた暮らしの風景は、現在の阿蘇地域の景観の特徴のひとつとなっている。しかし、近年多発する自然災害に対応した復旧・復興工事、対策工事等で「即応性」「耐久性」「経済性」が優先されることでこうした阿蘇の歴史的・文化的な景観は喪失の一途をたどっている。

白川・黒川の二河川に着目すると、度重なる河川改修により護岸の多くは無機質なコンクリート面を晒しており、阿蘇本来の風景とはかけ離れた光景が広がっている。1997年の河川法改正により「河川環境の整備と保全」が新たに加えられたことで、日本全国で従来のコンクリートによる河川整備から歴史的風致の環境を保全・整備する方針への切り替えが行われつつあるが、白川および黒川の改修・災害対策・復旧の現場を見れば、今もなおコンクリートブロックを主とした護岸が築かれ続けている。

2. 研究の目的

本研究では、阿蘇地域を流れる白川・黒川において歴史的風致を大切にしたい河川環境整備の実施に向け、今後どのような川づくりを実施すべきかを考える基礎的な情報として(1)歴史的・文化的な河川景観の特性と現状を把握し、(2)現在の河川景観に対して当事者である地元の人や観光客がどう感じているのかについての整理することを目的とする。

3. 研究方法

まず、地域史、過去の新聞記事、古地図、写真集等を精査し白川および黒川の歴史的・文化的な河川景観を探した。次に、文献調査から推測した歴史的・文化的な河川景観を基に今後の川づくりの規範となりうる歴史的・文化的な河川景観が現在の白川および黒川に残されていないか現地踏査により確認した。

その際、筆者の所属する九州大学景観研究室が2019年に行っていた調査³⁾を参考にした。最後に、現状の白川・黒川の河川景観を類型化した上でそれぞれについて観光客を対象に、阿蘇らしい・阿蘇らしくない風景はどれかと印象を問う設問によりアンケート調査を実施した。

4. 規範となりうる河川景観と現状の把握

過去の写真等から、歴史的・文化的な河川景観は、両河川とも基本的には自然的な土羽の護岸が主であり、白川では蛇行部の外側の護岸や橋のふもと等強度が必要な部分には空石積み護岸も存在し、黒川は河川合流部等で空石積み護岸が存在していたことが確認できた。また、行政へのヒアリングから、災害によって河川護岸が破壊される度コンクリートブロックによる災害復旧が長期に渡りおこなわれてきたことが確認できた。その結果として、現在の白川と黒川から規範となりうる河川景観を見つけ出すことは不可能であることが判明した。

5. アンケート調査

予備調査を3回実施し、アンケートの設問や写真の画角等を検討・修正した上で、白川・黒川それぞれについて対面式のアンケート調査を実施した。本調査では図-1に示すように現在の河川景観の中から昔の姿に近いと考えられるもの、今日一般的なもの等を含む9枚の写真を用いた。調査は2021年10月30～31日に「道の駅阿蘇」「道の駅あそ望の郷くぎの」「阿蘇神社」で実施し、観光客100人(黒川50人、白川50人)の協力を得た。なお、被験者の年齢や性別が偏ることがないように日本の人口比率と同じ程度になるように配慮した。

アンケートは、年齢や性別、居住地などの基本情報について尋ねたうえで、以下の設問からなる。

(a) パネルに示す写真のうち「阿蘇らしい川辺」と思うものを2つ選び、その理由を教えてください。

(b)同様に「阿蘇らしくない川辺」と思うものを2つ選び、それぞれ理由を教えてください。

集計の結果、白川・黒川ともに植物で覆われ自然的な印象の護岸や歴史的な石積みの護岸がある川辺の写真が「阿蘇らしいもの」として選ばれる傾向が強く表れた(図-2)。その理由として、「自然的である」、「人工物が(見え)ない」、「生き物に優しい」、「地の植生がある」といったワードが中心であった。

一方で「阿蘇らしくない」ものには、コンクリートブロック積み護岸やコンクリート構造物のある写真が選ばれた。理由には、「人工的である」、「自然が少ない」、「整備されすぎている」、「どこにでもある」などのワードが中心であった。また、石積み護岸であっても、写真②に示した間知石による谷積みは「整いすぎている」「人工的に見える」などの理由から阿蘇らしくないと判断される傾向が認められた。

以上の結果から、観光客にとって「阿蘇らしさ」とは緑が多く曲線的であることであり、コンクリートが用いられるか直線的であるものは、「阿蘇らしくない」ものとして目に映っていることが伺えた。被験者には、事前に阿蘇の歴史的・文化的な河川景観に関する情報を与えていないが、偶然にもそれらの河川景観と似通ったものが「阿蘇らしい」と感じる事が判明した。そしてこれは、現在熊本県が行っている災害復旧とは異なる方向、反対方向を向いたものである。



図-1 白川のアンケートパネル

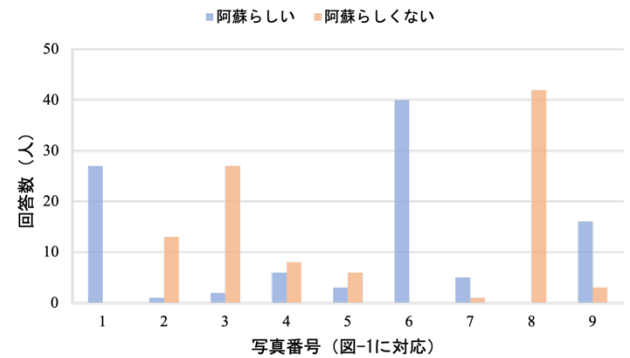


図-2 白川のアンケート結果 (回答数=100)

6. 結論と展望

観光客を対象にアンケート調査を行った。アンケート結果からは、現行の災害復旧を続けると阿蘇地域の魅力は低下していく一方であると言える。

今後は、阿蘇地域に長く暮らしている住民の方々を対象に同様のアンケート調査を実施するとともに、しかし、観光客のための川ではないため地元住民の意見を聞くことも重要である。次の段階としては、地元住民を対象に同様のアンケート調査を実施し、身近にあった以前の川の姿がどのようなものであったかを明らかにしていく必要がある。

また、このアンケート結果を熊本県の河川担当者等と共有することで現状の災害復旧手法を見直し、歴史的・文化的背景を踏まえた河川景観の再生に道を開く議論のきっかけとなることを期待したい。また、住民の方々、行政、専門家による話し合いにより、阿蘇にふさわしい今後の川づくりの方針について合意形成を行っていく。